

放流技術開発調査(ヒラメ)

小田切譲二・小倉大二郎・池内 仁

奈良 賢静

発 表 誌 名

昭和60年度放流技術開発事業報告書(ヒラメ班)、昭和61年3月、P 27～34

抄 録

- (1) 天然のヒラメ稚魚の着底期は、昨年と同様の7月中・下旬であり、55～58年と比べて1～2旬遅かった。稚魚の着底尾数は70万尾と推定されたが、55年以来では58年と同水準の極めて少ない値となった。着底生息尾数の年変動は、およそ10倍と推定された。
- (2) 人工種苗を放流した時の再捕例では、放流後2年経過しても最大移動距離は50kmであり、天然魚の例(平均移動距離、北上20km、南下40km)と比べ、移動は狭い範囲にとどまっている。
- (3) 56～59年の4ケ年のアミ類分布量の時期別変動によれば、分布量が最大となるのは8月であった。ヒラメ稚魚の餌料転換サイズは年によって異なり、59年は最も小さいサイズ(全長3cm)であった。環境中のアミ類の種に対するヒラメ稚魚の選択性はなかったが、全長3.5cm以下の稚魚は体長10mm以下の小型のアミを摂餌していたことから、サイズによる選択が働いていた可能性がある。
- (4) 青森県北部日本海で獲られたヒラメの右耳石を用いて、年令と成長を調べ次の成長式が得られた。

$$\text{雌} \quad \ell_t = 187.3 (1 - e^{-0.0599(t+1.0204)})$$

$$\text{雄} \quad \ell_t = 93.6 (1 - e^{-0.1309(t+0.9645)})$$

- (5) 天然の0才ヒラメの体色異常(無眼側)の出現率には年変動(約6倍)があり、60年は1.6%と高かった。1才魚以上では10.2%であり、銘柄別にみると「小」以下は6～9%、「中」以上は10～80%であった。